

大切な存在

一年 瀧井 希

「苦しい。」

冷たくなった毛をそつとながら、私はそう感じた。飼っていた犬が突然死んでしまった。私は、何も考えられずただ悲しかった。

「おすわり。」

という、いつもすわってくれた。私が生まれる前からずっと家にいて、いつも家族をいやしてくれた。特におじいちゃんは、とてもかわいがっていた。家でとれた柿をよくあげていた。

「今日は、柿をあげたよ。」

と、いつも話してくれる。私も一緒になって柿を食べる。もう家族同然なのだ。ときどき私もえさをあげたりする。そうすると、しっぽをふって喜んでくれる。その様子がとてもかわいくて、つたくさんあげてしまう。夏には、水遊び、冬はタオルをかけてあげる。ずっと一緒にすごしてきた。いつも家族の中心にいた。

ある日、私が遠くに出かけていた日の帰りの車の中、突然父が言った。

「死んじゃったよ。」

私は、その一言でわかった。その時はただ、

「悲しいな。」

と思っただけだった。でも、家に帰ると急に悲しさがこみあげてきた。本当に死んでしまったんだと感がわき、頭が真っ白になった。私は後からとても後悔した。最後まで一緒にいてあげられなかったことが悔しかった。次の日、最後のおわかれをした。となりになっていた姉は泣きそうになっていた。おじいちゃんもずつとかわいがっていたのでとても悲しんでいた。私は胸がとても苦しくなった。

それからしばらくして、ふいに犬小屋をみた。なにもいない小屋、静まりかえっていた。私は、それを見てまた悲しくなった。あたりまえの存在が実はあたりまえではないことをとても実感した。

動物を飼うと、悲しい思いをすることがあるかもしれない。でもそれ以上に私たちを幸せにしてくれる、とても大切な存在なのだ。私は、この出来事を通して、いつもそばにいてつらい時に支えてくれる存在だという事に気がついた。そんな存在が突然いなくなってしまうと、とても悲しい。

人間が守っているつもりでいるけれど、実は、人間が支えられているのだ。私はこの事を通してそれに気がついた。だからこそ、私はペットたちにもっと感謝をして、大切にしていきたいと思った。